

「国風文化」期の真言密教

高野山大学 櫻木 潤

本発表では、「国風文化」期における真言密教の動向について、弘法大師入定留身信仰に注目する。

平安時代中・後期の文化の名称として使用される「国風文化」は、これまで、遣唐使の廃止（正確には停止）にともない、中国文化の受容が途絶え、内向きな自文化意識のもとで形成された文化であるとの見方が定説であった。しかしながら、近年の日本古代史研究の成果により、当該期は、アジア海域を活動の場とする海商によって活発な日中交流が行われ、特に僧侶たちは彼らの商船を利用し、盛んに中国に渡り、五台山などの巡礼を通して、日本文化に大きな影響をもたらしていたことが明らかにされている。したがって、「国風文化」期における日本仏教界の動向についても、こうした最新の成果をもとに再検討する必要がある。

「国風文化」期には、観音信仰をはじめとする多様な信仰が広がり、人々は末法からの救済や往生を願うようになるとされるが、真言密教にあっては、高野山や東寺を中心として弘法大師入定留身信仰が成立する。『続日本後紀』承和二年（835）三月丙寅（21 日）条に「終_レ紀伊国_一」と記される弘法大師空海（以下、空海とする）は、高野山において生身のまま入定し、弥勒の下生を待っているとされ、藤原道長の高野参詣をはじめとした多くの貴紳らによる高野参詣を促すことになった。

弘法大師入定留身信仰をめぐるのは、大正期の歴史学者である喜田貞吉氏の研究以来、近年では松本昭氏、白井優子氏、辻本弘氏、俵谷和子氏、モリス・ジョン氏など多くの研究の蓄積がある。しかし、その成立の背景として、すでに大正期の喜田氏と加藤精神氏による空海の入定説をめぐる論争において、『仏祖統記』や『宋高僧伝』などによる影響が示唆されているものの、これまでの研究においては、中国仏教の動向からの影響という視点から考察されたものはほとんどない。松本昭氏は、『続高僧伝』の天台智者大師智顛の伝記を「発想のヒント」と指摘するが、その実証性は乏しいように思われる。

榎本淳一氏の指摘によれば、僧侶の遺骸をミイラ化し、保存・崇拜することは、道教の影響によって中国では古くから存在したが、即身仏への信仰が庶民まで拡大するのは唐代以後のこととされる。松本氏が指摘した智顛については、実際に天台山を訪れた伝教大師最澄や慈覚大師円仁などの記録にはそれを拝したとする記載はなく、こうした中国での信仰の知識が日本にもたらされるのは、平安中期の奄然以降のこととされる。

本発表では、「国風文化」についての近年の視点をふまえ、榎本氏の指摘にもとづき、弘法大師入定留身信仰の成立をめぐる背景について考察するとともに、古代から中世への移行期における真言密教のあり様について考えてみたい。

キーワード：弘法大師入定留身信仰・国風文化・「高僧伝」